

虚の符

洪水企画 2014.9.10

http://www.kozui.net

Universe 二条千河

わたしを朽木と呼ぶものがある
土の上に身を横たえて幾年月
乾ききった道管にも
樹皮の割れ目にも幹の空洞にも
森く触角や脚や胴体や
その分泌した粘液や卵や排泄物が
隙間なくひしめき合っている
今この体内には
むしろ生が充滿している

かつて地中に根を張って
身をまっすぐに立てていたころは
たった一つの命さえ持て余し
風が吹いても雨が降っても騒ぎたてたものだが
緑の葉を残らず落としたときに
その裏に隠した数多くの口をも手放して
わたしはもはや物言わぬ骸だ
代わりに小さな生き物たちが
腐った体の中で始終騒ぎだてている
風が吹いた雨が降ったと

自分が死ぬと同時に時間は止まり
世界も消えて無くなるに違いないという
根拠のない確信はやはり誤りだった
その瞬間
わたしは一つの命ではなく
無数の生を宿す一つの世界となつて
新たな時を刻み始めた

わたしを屍と呼ぶものがある
それはそれで構わないが
だとすれば
いつか若木であつたわたしに
有り余る養分と陽光とを恵んだ
この宇宙もまた
途方もなく大きな誰かの亡骸だつたのだ

(リンゴがもつばら vampires の歯牙と……)

たなかあきみつ

リンゴがもつばら vampires の歯牙と等号で結ばれるとき
その前夜に黄色フリークのリンゴは暗赤色の頸に変容する
リンゴは血を嘔く、いくたびか
ほら一九三〇年代ミュンヘンの街路の闇の汁液を縦揺れにしばらく
それでもリンゴは血を嘔く、
リンゴの皮しだいで暗赤色があるいは脳裡の黄色があるいは黄緑が
リンゴをかじってはかむそのかじかむ歯間に
閃絶するほど岩漿の血に染まる

リンゴの芯は血の空き箱の植物性の把手だとしたら
このリンゴがたとえば駱駝のひと瘤へと形状記憶中の理由は何か
この頃は変形をめぐって視点的異なる路面においそれとは
ぐねぐねのメビウスの針金は転がっていない？

脳内ならいざ知らずこの頃はすんなり Valotton の画面ごころか
園芸店の店先ですら粉斜の種の金蓮花かげほしの血の空き箱や
針金すら粒だつ黄色に集光しつづ集合住宅の通用口の
尖端がさびた有刺鉄線以上に夜の緑の首野に落ちていない

血の匂いを恣にして
リンゴの果肉はπの字形に歯槽という浴槽で仮眠する
依然として埃っぽい鏡は黄緑のスネアドラムに
やんやの撥さばきで反撃する

メキシコの画家 Remedios の(いきいきとした生命)(一九五二)
ならびに《生命の果実》(一九五三)には、血の匂いを
恣にするリンゴの実は見当らない、寒気のアソロジューえに
ますます暗く赤味を増すリンゴは流血の惨事を恐れなから。

円筒形を描ききるむずかしさをまずは万全なるその習得作業を
こそ思えしらじらと遺留分をさすかに死後酌量して
揚羽蝶もどきの展翅模様をさせるジャングルに腐化するまえに
それでもあれかこれかではなくリンゴ酒の古樽もその座位もだ

反物質の(爪が引き裂く時間)の舌の根も乾かぬうちに
そこからとり急ぎ流失しようとして
ヴェネツィアのある運河の水面にも浮上する
ギョウター・ユッカーの釘庭は芽吹きさきさき血を抜栓する

緩傾斜の斜面のリンゴの木々をはがれた光は
濫用の鉄を研ぐ雨あがりの窓ガラス上で
巻かれた羽毛をぐんぐん引っ張る
いつまでもポレンポレン点々といぶされて発光するか

ローテーションを永久停止せられたままの
チェルノブイリのリンゴすなわち観覧車の群れは小難雨の仕打ちで
非連続的にはころびたその網膜のほろ苦さたるや
極東の百合根の食味ごころではない

小島きみ子

黄色いダリアが咲いていて

午睡の座敷を吹き抜ける風の手は
額にかかると髪を
ためらいがちに梳かして
小川の水音に混じった
（僕だよ
そう言ったのはだれ
（僕です
そう言ったのはだれ
もう誰も通らないシジミ蝶の道
僕の家と連れて行くと言った
あなたの家のお母さんは
もう居ない
お母さん、お母さん
そう言うてあなたと一緒に走った道
在来線の無人駅で降りると
黄色いダリアが駅舎の裏に咲いていて
小川のせせらぎが
水の上を流れる光が
あなたの声になる



（僕だよ
もう、誰もいない道
黄色いダリアだけが咲いていて

森山 恵

耐えきれぬ薬

街の駐車場で寝泊する
ラクダ
あきらめたような優しい睫毛に囲まれている
赤と黒のアラブ織物に覆われ
瘤が隠せる以上の謎を
背負っている
痩せこけたラクダは
炎天下、赤い絨毯に膝を折り
王のようでも
乞食のようでもあり
ケモノの具いをたてている
尻のまわり、蠅が飛ぶ
白いワゴン車の横
炎熱の刻
ラクダ遣いの目を盗んで
背中の瘤に耳を当てる
濃く強いケモノ臭と中東の逆立つ殺気
瘤の中には薬のラクダがみつしり詰まっている
熱が耳の奥で砕け
薬に火を放つ
瘤の中のラクダたちが燃え
湧き立ち
砂漠に広がる劫火
アラブの火刑台を昇る
ラクダが立ちあがる
エンジン音を響かせガソリンを垂らし
高速で走り出す、ワゴン車
旅人よ
砂漠の民よ
薬のラクダよ



久野雅幸

かぎかつこ (三)

よく見ると
「」でくくられている人がいる
人の多い町ですごしている
見かけるのは
それほどめずらしくない
いつか引用の「」にくくられてしまった
自分があるべき本来の文脈に入ることができないでいるのだ
とぼくは思う
*
頂に近い山肌突き出た
眺めのよい岩の上に
悠然とのつている
一個の「」
一目見て
大きさに驚く
あれは
くくっていたものから解放され自由になったことで得た大きなのか
それとも
くくっていたものを失った喪失の思いによるものか
あるいは
これから何か大きなものをくくろうというころさしの大きさであるようにも
思われた
*
困惑する
飛び回る赤トンボのむれの中に
一匹
「」でくくられているものがあるのを見つけて

学校の休み時間
女の子が机に鉛筆で書き
その中に何かを書き入れようとして
しばらくためらい
結局は何も書かないで
消しゴムですっかり消してしまった
「」のかなしいこと

47と35 平井達也

47と35
公約数が見当たらないね
47歳の私と35歳の君
気がついたら私は素数だね
どうにも割り切れない私と
七五調にお気楽な君が
深夜1時を共有している
二人の差は12
いつまでたっても12
やたら約数が多い数
たやすくばらばらになつてしまふね
そしてあとしばらくすると
君はその3倍に
私は4倍に
そしたらいつべんに公約数が多くなるね
一緒にいられる時間は増えそうだけれど
なんだか忙しいかな

米山浩平

白雪姫の世紀

王妃はひれ伏す
網膜を焼かれ
肉眼視した鏡にうつる
最も深遠な白雪姫
指令はくだされた
こびとたちの晚餐
土釜に放り捨てた想念が煮えたつ
蒸気の網目を破り
価値転倒を見わたす女帝と生るべく
沸騰するカオスをたぐり寄せ
着衣の至高に達するピーナス
ひっくり返ったガマガエルの腹に片足を乗せて
驚鼻の白雪姫はあらわれた
蝶と蛾の配置が軋む
コウモリの飛ぶべき間に鳩が行き交う
稲妻の鳴り響く天上
頬づえをついて
二元論の抗争を傍観する白雪姫
あらゆる美醜の逆立ちした荒野
無重力の惑星の絞首刑が公開された
魔法つかいの帯は目を描いたまま

池田 康

〈機械〉

〈機械〉がやってきた
乗って速くへゆくのだ、音の速度で
飛鳥 アラビヤ アバダチアへ、光の速度で
明治 ルネサンス 古代エジプトへ、神の加速度で
きしむメカニク、きしむ君達僕達
軟弱な叫び
世界の歪曲率が史上空前となる今日の今
〈機械〉はやってくる

〈機械〉がやってきた
ボタンを押せばランプ点灯
声語り始める、君達僕達の物語
つまり歴史、いや嘘八百のメロドラマ
と承知しながら、巻き込まれる君達僕達
登場人物にされ得意の僕達君達
声はいつかなやまない、ボタンを押して
止めなければ、しかし
いつのまにかボタンは格納され
〈機械〉は朴訥に動きつつける

〈機械〉がやってきた
あなた病気で、と言う
君達僕達老若男女の誰彼に向かつて
土足で踏み込み、身体の内面写真を撮って
病気で、危険です、薬です、手術です
メスを入れる、カテーテルを差し込む
病気が仕込まれ、現れ
たちまち、みごとに退治され
〈機械〉は凱歌をあげる

〈機械〉がやってきた
万能の召使
強権の主人
キーを叩けば文字が灯る
キーを叩けば手紙が届く
キーを叩けばなんでもかんでもイース・サー
蹂躞してきたのだ、君達僕達の魂を
と危機を煽つてみても、不気味な沈黙の
おとなしい召使の、やさしい主人の
〈機械〉は知っている、魂などない

〈機械〉がやってきた
うたおう、一緒に
君達僕達の幸福の歌を
完璧な伴奏のものらしく
さあうたおう、斉唱
大きく口をあけて、三、四、
どうしてうたわないのか、君達僕達
なにが不満なのか、かまととないぶに
〈機械〉は首をかしげる

